

東京大学大学院工学系研究科原子力専攻
専門職大学院 20 周年記念シンポジウム 来賓挨拶

令和 8 年 2 月 2 7 日

原子力規制委員会の山中伸介でございます。

本日は「東京大学大学院工学系研究科原子力専攻 専門職大学院 20 周年記念シンポジウム」にお招きいただき、誠にありがとうございます。

私は約 35 年間にわたり、大阪大学において教育に携わっておりました。本日はその経験も踏まえ、原子力分野の教育について、日頃私が考えていることを少しお話しさせていただきたいと思っております。

原子力の分野は、しばしば「実学」と言われます。

ここで言う実学とは、単に理論や知識を学ぶことにとどまらず、実社会の中で活かされ、現場で用いられる学問を指します。学んだことが社会の安全や信頼を支える役割を果たす学問であると言えます。

原子力は、設計、運転、防災、そして規制など、あらゆる局面において、現場での的確な判断と確実な実務遂行が重視される分野です。机上の理論だけでは十分とは言えず、実際の設備や現象を理解した上で、現実の制約の中で適切な判断を下す力が重要となります。

その意味で、原子力は典型的な実学であり、実務に直結する技能を、着実に次の世代へ引き継いでいく必要があります。いわばマイスター制度にも通じるように、現場で培われた知恵や技を継承していく仕組みを整えること、そして時代が進んでも変わらずに教育を行える「場」を社会として維持していくことが、大切であると感じています。

それと同時に、原子力の分野に携わる人材には、技術や知識を身につけることに加え、「原子力に携わる者として、どうあるべきか」という姿勢や責任への理解が問われます。そうした人材を育てていくことは容易ではありませんが、原子力分野の教育において避けては通れない課題であると、私自身、長年教育の現場に身を置く中で実感してきました。

こうした中で、東京大学原子力専攻専門職大学院では、高い水準の専門的な座学に加え、実技を重視した演習が体系的に整えられています。また、工学倫理に関する教育やリーダーシップ、コミュニケーションなどの分野もカリキュラムに組み込まれており、原子力に携わる人材として求められる資質を総合的に育む教育が実践されているものと認識しております。

専門職大学院には原子力規制委員会からも多くの職員が入学し、学ばせていただいております。修了された方々は、規制委員会においても中核的な人材として活躍しており、その教育の成果を強く感じているところです。

専門職大学院は、これまで我が国の原子力に係る教育を力強く牽引してこられました。その20年にわたるご尽力に、心から敬意を表したいと思います。

今後とも、原子力分野の教育をリードし続けていただき、社会の信頼に応える人材を輩出し続けていただくことを強く期待しております。

結びに、貴学のますますのご発展を祈念し、簡単ではございますが、私の挨拶とさせていただきたいと思います。

ありがとうございました。